

『狭衣物語』の「宮の中將」をめぐって

後藤, 康文
九州大学大学院 (修士課程)

<https://doi.org/10.15017/12028>

出版情報 : 語文研究. 55, pp.1-9, 1983-06-05. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

『狭衣物語』の「宮の中將」をめぐって

後 藤 康 文

「狭衣物語」には、二人の「宮の中將」が登場する。即ち、「式部卿宮の中將」と「中務宮の中將」とがそれである。本稿において、私は、この二人の「宮の中將」をめぐって、そこに些かの矛盾を看取できるのではないか、という点を論じてみたいと思う。

一

焦点となるのは、卷三の終わりに登場する「宮の中將」である。

あくがるゝ我魂もかへりなん

思ふあたりに結びとゞめば

など、手習にすさび給ふ程に、宮の中將、参り給。紫苑色の御衣どもものなよらかなるに、草のかうの織物の指貫ばかり着給て、物あはれに思したる気色にて、眺め臥し給へるさまの、言ふかたなく、めでたく見え給に、人知れず思ひ扱はるゝ人の御事、まづ思出られて、この御方の塵ともなさまほしくて、この御手習を見るまゝに、

たましいの通ふあたりにあらずとも

結びやせましがひのつま

(日本古典文学大系 卷三 P 313 ~ 314)^{注2}

狭衣が、例によって、女二宮や源氏宮への執着からひとり歌を書きすさぶところへ、「宮の中將」が現われ、二人が中將の妹の姫君をめぐって、やりとりを交わす場面が、暫く続く。右は、その発端にあたる部分であるが、ここは、卷四にはいってから展開される、式部卿宮の姫君を軸とした形代物語を導く、いわば伏線の如き役割を果たすことになる。従ってこの「宮の中將」は、従来の注釈書が解するように、「式部卿宮の中將」でなければならぬ。現在、完成された形としての全四巻を鳥瞰する限りにおいて、このことは自明であり、そこに何ら問題があるわけではない。

ところが、これを一旦、卷三までが執筆された時点にまで溯らせて考えてみると、事は些か異った趣きを呈するのではないか。つまり、卷三までの物語の展開内容だけから判断する時、果たしてこの「宮の中將」を、作者は初めから「式部卿宮の中將」のつもりで書

いたのだらうか、という疑念が湧いてくるのを禁じ得ないのである。私はむしろ、この「宮の中將」は、もともと「中務宮の中將」の筈ではなかったかと考えるのだが、このことについて、以下少しく私見を述べる。

なお、これに先立って、次のことをお断わりしておきたい。周知の通り、「狭衣物語」は、その享受の過程において、かなり早い時期より本文改変が行われて、現在残る伝本は、およそ三つの大きな系統に分類できるとは言え、本文異同の情況は、実に複雑多岐にわたっている。また、その三系統のうち、特に第一系統・第三系統のいずれが原本に近いのか、未だ完全に決着が付いているとは言えないようである。従って、諸本に共通する本文については問題ないが、取り扱う部分に異同がある場合には、明らかに対象から除外してよいと思われる異同本文は、適宜これを切り捨てながらも、簡単に判断できないものに関しては、それらを併置して考慮し、最大公約数を踏まえて論を進めて行くことにしたい。

二

卷三が閉じられた段階で、先の「宮の中將」が、いずれの人物であったのかを判断するためには、まず、それ以前において現われる「宮の中將」の様相を、調べておく必要がある。そこで、初めに、卷一・卷二から「宮の中將」が登場する部分を、仮りに日本古典文学大系本によって引用呈示し、それぞれにおいて、問題となる箇所との異同を、「校本狭衣物語」卷一・卷二所収の諸本及び細川文庫本を以って、一覽表にしてみた。

A 春宮、「興あること」とのたまはせて、さまゝの御琴ども、笛などをし渡させ給。中納言に琵琶、兵衛督に箏の琴、宰相の中將和琴、源中將横笛、式部卿の宮の少將笙の笛など賜はず。只今の名高き上手どもなるべし。(卷一 P 42)

B 「いさや、かの後の宮にありける伯の君の女は、かこつべき故やありけん。母亡せて後、あはれになんありけるに、かの上の、「つれづれの慰めにせん」とて、迎へ給ふべき」とこそはあんめりしか。さやうの料にやあらん。男子の、あやしきもあんなれど、宮の少將(に)似たりとて、かの中務の宮の、子にし給ふと聞きしかど、さもあるべきやうはありけん」(卷一 P 77~78)

C₁ 中務の宮の少將と言ひし、今は三位の中將、この頃、殿上人の中に、何事も勝れたるものに思はれたる、この殿に人よりも仕まつり馴れまほしきものに思聞えさせられたれば、かゝる御供にもをくれず参り給。中宮の御叔父の式部卿の御ゆかりに、この方々にも、他人よりは睦び聞え申給て、大將殿の御有様も、なつかしくなづさはまほしさに、明暮、立ち添ひ聞へたるばかりを、猶え振り捨て給はずなりぬる。(卷二 P 207~208)

C₂ うき舟のたよりも見んわたつ海の

そこと教へよ跡の白波

あはれ」と、ひとりごち給て、「是人命終当生切利天上」と、うちあげ給へるも、「山の鳥獸と言ふらんものも耳立つらんかし」と、

四季本	宮内庁四冊本	雅章本	鈴鹿本	細川本	大島本	蓮空本	為相本	為秀本	内閣本	平出本	深川本	卷	
												A	B
中務宮の少将	式部卿宮の少将	式部卿宮の少将	式部卿宮の少将	中務宮	ナシ	ナシ	宮の少将	宮の少将	宮の中将	宮の少将	宮の少将	ナシ	一
かの中務宮	かの中務宮	かの中務宮	かの中務宮	中務宮	宮	かの宮	かの宮	かの宮	かの中務宮	かの中務宮	ナシ	三	C ₁
頭中將	頭中將	頭中將	三位中將	頭中將	頭中將	三位中將	三位中將	三位中將	頭中將	頭中將	三位中將	三位中將	C ₂
宮の中將	頭中將	頭中將	三位中將	宮の中將	宮の中將	三位中將	三位中將	三位中將	宮の中將	宮の中將	宮の中將	宮の中將	C ₃
宮の中將	中將	中將	中將	宮の中將	宮の中將	中將	宮の中將	宮の中將	宮の中將	宮の中將	宮の中將	宮の中將	二

C₃ 三昧堂の方に、いみじう功入りたる声の、少し枯れたるして、千手経をぞ読むなる、「菩提の因とならん」といふ所の、中に、耳とまり給に、宮の中將、谷にむかひたる勾欄に押しかゝりて、思ひ澄ましたるに、いみじうあはれがりて、「いかやうなる僧ぞ」と、見せに遣りたるに、「片目悪しき僧の、いみじうあはれげなるに候ひけり」と申せば、呼びに遣らせ給へり。(卷二P210~211)

Aは、天稚御子事件が起こる夜の、宮中管弦の場面であるが、ここで笙の笛を受け持つ人物は、深川本等八本においては「式部卿宮の少将」であるが、その他の諸本では「中務宮」とある若干の伝本及び前田本を除いて、「中務宮の少将」である。このように、本によって異なる人物が登場しているということは、伝来の過程で、いづれかがいづれかに書き改められたと見做すべきであろうし、また、これを三谷栄一氏の伝本研究の成果に照らしてみると、概ね、第一系統及び第一・第三両系統の混合本が「式部卿宮の少将」、第二系統以下の諸本が「中務宮の少将」という本文を有していると考えられ、

三谷氏の所論に拠って、第一系統が原本の姿に近いとすれば、原形は、或は「式部卿宮の少将」なのかも知れない。けれども今は、先に述べたように、伝本によって両者の場合があることを確認しておくにとどめ、次項へ移りたい。Bは、今姫君の引き取りに關する堀川上の発言である。この部分、「宮の少将」に關しては、諸本だいたい一致しているで、これに従ってよいと思われるが、「かの中務の宮」については、深川本はこれを全く欠き、内閣本等十

平瀬本	高野本	前田本	為家本	承応版本	古活字本	黒川本	鷹司本	押小路本	松浦本	中田本	竜谷本	東大本	武田本	竹田本	京大五冊本	鎌倉本	吉田本	松井三冊本	宮内庁三冊本	三条西本	文禄本	宝玲本
		ナシ	中務官の少将	中務官の少将	中務官の少将	中務官の少将	中務官の少将	中務官の少将	中務官の少将	中務官の少将	中務官の少将	中務官の少将	中務官の少将	中務官	中務官の少将	中務官の少将	中務官の少将	中務官の少将	中務官の少将	中務官の少将	中務官の少将	中務官の少将
		宮の少将	宮の中将	宮の少将	宮の少将	宮の少将	宮の少将	宮の少将	宮の少将	宮の少将	宮の少将	宮の少将	宮の少将	宮の少将	宮の少将	宮の少将	宮の少将	宮の少将	宮の少将	宮の少将	宮の少将	宮の少将
		かの宮	かの宮	かの宮	かの宮	かの宮	かの中務官	かの中務官	かの中務官	かの中務官	かの中務官	かの中務官	かの中務官	かの中務官	かの中務官	かの中務官	かの中務官	かの中務官	かの中務官	かの中務官	かの中務官	かの中務官
頭中将	(落丁)	頭中将	頭中将	三位中将	三位中将	三位中将	三位中将	三位中将	三位中将	三位中将	頭中将	頭中将	頭中将	頭中将	三位中将	三位中将	三位中将	頭中将	頭中将		頭中将	頭中将
宮の中将	(落丁)	中	三位中将	三位中将	三位中将	三位中将	三位中将	三位中将	三位中将	宮の中将	宮の中将	宮の中将	宮の中将	宮の中将	三位中将	三位中将	三位中将	宮の中将	宮の中将		宮の中将	宮の中将
宮の中将	(落丁)	中	宮の中将	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	宮の中将	宮の中将		宮の中将	宮の中将

六本には「かの中務官」、古活字本等十四本には「かの宮」と記されている。これら相互の関係については、意識的な改変のほか、たとえば、注記の混入や本文脱落の可能性などによる先後が、考えられるかも知れないが、ここでは一切不問に付すとして、それぞれの場合について、A項との関連がどのように解釈できるかを考えてみたいと思う。

初めに、「かの宮」とある諸本及び深川本について。まず、「かの宮」の「かの」という表現は、普通には、読者にとって既知の人物を指すととれるわけで、ここでは、直前の「宮の少将」の父親であるということによって、具体的には規定される筈である。そしてその場合、この「宮の少将」も、自然に読むならば、ここで新たに登場した人物とは考えにくく、また、これま

でに複数の「宮の中将」が出て来ているわけでもないから、A項で既出の「宮の中将」と同一人物と判断されると思う。このように考えると、これら諸本のうち、純粹に「宮の少将」||「式部卿宮の少将」(「かの宮」||「式部卿宮」)と判断されるのは、蓮空本と、「かの宮」は欠くが同様に考えられる深川本の二本ということになる。そして、そのほかの「かの宮」とある諸本は、一本を除いて、すべて「中務宮の少将」(「かの宮」||「中務宮」)と見做されると思う。

次に、「かの中務宮」とある諸本であるが、この場合は、A項で「中務宮の少将」とあった本においては、「宮の少将」||「中務宮の少将」と考えて差し支えないが、同じく「式部卿宮の少将」とあった本(内閣本等五本)では、ここにおいて、もうひとり別の「宮の少将」を登場させている、という解釈が成り立つ。

以上、A・B両項を纏めると、ここまで(巻一)で「式部卿宮の少将」のみ登場する本は、深川本、蓮空本の二本に、B項の該当部分を欠く大島本を加えて三本、両方出て来る本は、内閣本等五本、そのほかの諸本では、「中務宮の少将」のみ姿を現わしているということになる。(巻一には、あと一回「宮の中将」が出て来るが(P 89~90)、これはB項の内容の反復であり、論には影響しないと考えられるため、省略する。)

巻二には、いって、「宮の中将」が姿を見せるのは、巻末近く物語第四年のことで、狭衣の粉河詣でに随行する人物として登場する。引用本文C₁、C₃がそれである。ここで、C₁における「宮の中将」に關しては、諸本みな「中務宮の少将」となっており、これを以って原形と認めてよいであろう。ということとは、これまで全く「中務宮

の少将」が現われていなかった、深川本、蓮空本、大島本にも、ここに至ってはつきりと、「式部卿宮の少将」とは別人の「宮の中将」が現われていることになり、それ以外の本では、これまで二回乃至三回にわたって点出して来たこの人物を、改めて正面から紹介していると解釈できる。

ところで、この条において、「中務宮の中将」が、それまでの「宮の中将」とは比較にならないほど詳しく描出されている点は、重視する必要があるのではないか。即ち、巻一の「宮の中将」は、いづれも、その人物についての具体的な叙述もなければ言動もなく、点出に過ぎなかったのであるが、ここでは「中務宮の中将」が、特に秀逸な殿上人として世評が高かったこと、堀川方を敬慕して日頃から近侍していたこと、特に狭衣には、「なつかしくなづきはまほしさに、明暮が立ち添」っていたこと等が述べられているのである。更に、作者が、狭衣の粉河詣でにあたって、その従者の代表にこの人物を選び、わざわざこのようにクローズ・アップし、粉河でのシーンにおいては、かなり重要な役割を担わしているという事実は、巻一の「宮の中将」が、もともといずれの「宮の中将」であったかに拘らず、ここにおいて「中務宮の中将」が、それまでとは段違いの比重で扱われていることを物語るのではないだろうか。そしてそのことは、読者の側には、かなり鮮明な印象となって反映したと思われる。

それでは、以上の点を踏まえた上で、最初に掲げた巻三の例に立ち戻って、考察を加えたい。

さて、ここで改めて問題の「宮の中将」を眺める時、あくまでも巻三までの時点でこれを判断するならば、「式部卿宮の中将」とは読めない、むしろ「中務宮の中将」とする方、自然であるとは思われないだろうか。

その理由の第一は、単に「宮の中将」とだけしか書かれていないのであるから、これを新たな人物の初出形であるとは考えにくい点である。これまでの「宮の中将」が、すべて「中務宮の中将」であった諸本では、たったこれだけの記述から、これを「式部卿宮の中将」と考えることは、到底できない筈であろう。そしてまた、A項で「式部卿宮の少将」とあった本にしても、既にC項で詳述された「中務宮の中将」の印象を越えて、これを「式部卿宮の中将」とすることが、果たして可能であろうか。それに加えて、既に「中將」に昇進していることが明らかな「中務宮の少將」に対して、「式部卿宮の少將」の方は、実際に「中將」という形では登場していないという事実もある。(尤も、この間、中將に昇進していたとしても不思議ではないが。)もし作者が、初めからそのつもりであったのならば、その場合、「式部卿宮の少將と言ひし、今は中將、参り給ふ。」或は、「式部卿宮の中將、参り給ふ。」くらいの説明が、あってもよさそうなものである。

第二は、「人知れず思ひ扱はるゝ人の御事」つまり「宮の中將」の妹の姫君が、中務宮の姫君であると解し得るのではないか、という点である。この人物については、これまで既に、挿話的に語られて

来ているのだが、その中で特に注意すべきなのは、巻二の女二宮垣間見の条における、女房達の噂話の部分である。

御前に人三人ばかりぞ近くさぶらふて、物言ふを聞き給へば、わが御うへなりけり。「さても珍しう、ゆゝしかりし夜の事どもかな。音に聞きし天稚御子をさへ見しよな。」△中略「中務の宮の姫君に、その夜の事を語り聞えさせしを、やがてそのまゝに絵に書き給へりし、△中略△かの姫君こそ、大将の御具にはせまほしう見えさせ給へ」など、うち解けたる物語なんすれど

(巻二 P127~128)

ここにおいて、中務宮の姫君は、女房達の「うち解けたる物語」の中でとは言え、狭衣の「御具にはせまほし」き女性として点出されているのである。また、狭衣自身も、心の片隅でゆかしく思う所あったらしく、

されど、いつのひまにかは、かの立聞き之夜、「具にしつべし」と聞きし宮の姫君も、ゆかしうおぼえ給て、「蓬の門」をたよりにやせまし」と、思つゝ、歩きのついでには御目をつけ給へど、よろしき人のある気色もなきを、問はせ給へば、「今、異人住むなりけり」と、聞くも、口惜し。(巻二 P143)

という条を持つ伝本もある。^{注12}後者については、後になって補入された可能性があるかも知れないので、一応保留するにしても、こうした叙述が、既になされていることを鑑みると、問題の部分における

「人知れず思ひ扱はるゝ人の御事」は、この姫君のことを指している」と読むことも、可能になってくると思う。作者はここにおいて、それまで別個に描いて来た「中務宮の中将」と「中務宮の姫君」とを、改めて兄妹として明示し、結び合わせたのではないだろうか。

第三の理由は、C₁項で述べられた「中務宮の中将」と、この「宮の中将」との、人物像の符合である。引用本文及びそれに続く部分から窺える「宮の中将」像が、C₁項でのそれによく照応するように思われるのである。具体的に挙げると、「(狭衣ガ言ふかたなく、めでたく見え給に、人知れず思ひ扱はるゝ人の御事、まず思出られて、この御方の塵ともなまほしくて(P314))」・「この御あたり塵ともならまほしかりけり(P315)」という感情は、C₁項での「大将殿の御有様も、なつかしくなづさはまほしさに、明暮、立ち添ひ聞えたる」というこの人物の日常から、自然と発露したものであろうし、また、狭衣の「宮の中将」に対する言、「昔より、人よりは、こよなく頼み聞えたるかひなく(P314)」・「まめやかに、昔より頼み聞えたるを(P315)」なども、これに逆から対応するものと受けとれる。更に、この人物の「人よりはおかしき(P314)」という秀逸性は、C₁項の「この頃、殿上人の中に、何事も勝れたるものに思はれたる」に照応するものではないか。以上のような符合は、巻二と巻三の「宮の中将」が、同一人物であるとすれば、よく理解できるように思う。

四

このようなわけで、巻三の「宮の中将」は、もともと「中務宮の

中将」として書かれたものではなかったかと、私は考える次第であるが、もしそうだとするならば、巻四に至って、この「宮の中将」が「式部卿宮の中将」であることが確定され、また、問題の条が、式部卿宮の姫君をめぐる物語部分の伏線的役割を果たしている事実との矛盾を、どのように説明すべきであろうか。私は、この矛盾について、形代構想の胚胎時点が、巻三擱筆後であったために将来されたものではないか、と想像するのであるが、次にその概略を述べてみたい。

巻三を書き終えた時点で、作者の念頭には、巻四展開上の大きな動因となる、式部卿宮の姫君を軸とした物語の構想はなかった。(というよりもむしろ、「源氏物語」の諸要素を再構成するにあたって、狭衣作者の場合、彼の大動脈であった形代構想を、自作の中に導入することを、これまで意識的に避けて来たのではないかと、私には思われる。)ところが、巻四を執筆するに及んで、作者は、狭衣に源氏宮の形代を与えることにした。或は、それを余儀なくされた。その時彼女は、巻三の終わり頃に書いた、中務宮の姫君に関する挿話を発展させることを考えついた。しかし、中務宮の姫君では、これを源氏宮そっくりの女性に造型するには、既に読者に知られ、一定のイメージを植えつけている点で、些か都合が悪かった。そこで、幸いにもこれまで余り触れることのなかった式部卿宮家に着目し、新たに式部卿宮の姫君を創造して、これを源氏宮の形代に起用した。「源氏物語」において、紫の上が式部卿宮の娘であったことも、その背景にあったであろう。ここにおいて、巻三の「宮の中将」は、「中務宮の中将」から「式部卿宮の中将」へと交替した。このようにして、冒頭に掲げた巻三の場面は、作者によって、結果として伏線

とも解されるべく、操作されたのではないかと思われるのである。

五

ところで、これまで述べて来たように考えることが、やはり無理であるとするならば、つまり、巻三の「宮の中将」が、当初から「式部卿宮の中将」のつもりで、作者によって描かれたものとするならば、これは、物語の手法として、かなり特異なものと言わざるを得ないのではないか、という気がする。

なるほど、物語作者が、その作品の中にそれまで現われていない人物を、漠然とした形で登場させる、或は、既出の人物を、それまで使われていない呼称によって呈示するという、やや唐突な方法を用いるケースはあり得る。読者に「おや」と思わせ、その人物への関心を惹きつけておいて、あとになって、「実は」という次第で種あかしをする。「狭衣物語」の場合、たとえば、巻三において「一品の宮（P246）」なる女性が登場するが、それまでに「一品の宮」は現われておらず、後の「（一条院ノ）姫宮は、一品になしたてまつらせ給へり。（P255）」という記述から、漸くこれが、一条院の姫宮を指したものであることが判明するケースなど、実例として挙げられるかと思う。

けれども、当面の「宮の中将」に関して、果たしてこれと同列に判断することができるのだろうか。まずは、これが、巻二で読者に印象付けられた「中務宮の中将」との混乱を惹起するであろうことを、顧みていない書き様である点に、どうしても疑問が残る。巻一で出て来る、宮の中将¹が、もともとは「式部卿宮の少将」であっ

たと仮定しても、巻二においてクロイズ・アップされた宮の中将¹は、諸本とも「中務宮の中将」である。従って、巻三において、たとえ作者自身が「式部卿宮の中将」のつもりであっても、ただ「宮の中将」と書いただけでは、それが読まれる時点で、「中務宮の中将」と混同されるのは必至であろう。狭衣作者が、こうした危険を予想せずに、或はそれを承知した上で、そのような曖昧な登場のさせ方をしたとは考えにくい。加えて、「宮の中将」の正体が、巻を隔てて明らかにされている点も、どうかと思われる。果たして当初の予定として、読者がついて行けそうもないこのような特異な手法を、敢えて作者は用いたのであるうか。

○

以上、かねてから疑念を抱いていた「狭衣物語」巻三の「宮の中将」をめぐって、ひとつの推論を試みた次第である。「狭衣物語」の複雑な伝本状況を思えば、右の如く、享受段階で多様化した現存諸本を同列に扱って、作者の構想を云々することは、方法の上でかなり問題があるう。しかし、その点をいくら考慮に入れても、右の本文上の矛盾は解消しないように思われる。本文の原形への溯源が甚だ困難な現状の下では、敢えてこうした試論を提出することも許されるのではあるまいか。

注

¹ 以後、¹を付して宮の中将と表記したものは、式部卿宮または中務宮の子息と考えらるる人物の、少将から中将に至るまでを総称代表する。

2 本稿における狭衣物語本文の引用は、日本古典文学大系本に依拠する。

3 たとえば、下組「後式部卿御子」・清水兵臣書人本「後式部卿宮の御子也」・有朋堂文庫「後式部卿宮の子」・校註日本文学大系「後式部卿の宮の子」・日本古典文学大系「後式部卿宮の子。巻四に宰相中将とある人。」(全書は、これに頭注を施していない。)

4 (イ)一覽表は、「校本狭衣物語」(巻一・巻二)に拠り、該当箇所を復元して作成した。ただし、細川本については、九州大学附属図書館蔵本を直接管見して加えた。

(ロ)次の諸本に関しては、それぞれに示す文献に拠って異同を確認した。→承応版本(九州大学文学部蔵本)・深川本(古典文庫影印)・宝玲本(古典文庫影印)・鎌倉本(古典研究会影印)・蓮空本(古典文庫翻刻)・大島本(未刊国文学資料翻刻)・内閣本(日本古典文学大系)

(ハ)諸本の配列は、便宜上、巻一・巻二を通じて校本巻一凡例の順に従い、古活字本及び細川本は、仮りに右の位置に挿入した。また、校本巻二のみに用いられている高野本・平瀬本は、最後に置いた。

(ニ)以下の考察は、これら諸本の範疇におけるものである。

5 為秀本・細川本・竹田本の二本には、「中務宮」とあるが、「若上達部、あまた候給(P.42)」うたこの夜の管弦であったことを考えると、成長した子を持つ年齢の「中務宮」が、その中に加わっていたとするよりも、若き名手たちが競演したと見る方が妥当であろう。よって今は、これを「の少将」の脱着した本文と見做して、考察の対象から除外する。また、前田本は、この部分を欠いているようなので、考慮しない。

6 「狭衣物語の伝来―巻一を中心として―」(「国学論叢」昭和十七年六月)「宮の中將」となっている伝本もあるが、「中」は「少」の誤写と考えられるため、特に顧慮しなくともよいと思われる。

8 大島本巻一は、蓮空本と同系本文である上(三谷栄一編著・未刊国文学資料「九条家藏本狭衣物語と研究」解説ほか)、且項では「宮の少将……かの」を欠き、また、細川本も同じ部分を欠くため、それぞれこの項の考察の対象からは除外する。

9 承応版本の注釈である清水兵臣書人本、同じく有朋堂文庫本、校註日本文学大系本、また、古活字本の注釈である日本古典全書本とも、この部分の「宮の少将」を「式部卿宮の少将」、「かの宮」を「式部卿宮」と解しているが、いかがか。ただし、全書巻末の系図には、「かの宮の子」となった「男子」の注として、「父ハ後ノ式部卿宮アルイハ中務宮カ」(傍点筆者)とある。

10 前田本は、A項の該当箇所を欠いているようなので不明。

11 細川本・前田本は除く。

12 深川本・平出本・内閣本・為相本・大島本・細川本・鈴鹿本・雅章本・宮内庁四冊本・四季本・宝玲本・文禄本・宮内庁三冊本・松井本・吉田本・鎌倉本・松浦本・前田本・高野本

13 このことについては、もし機会があれば別に論じてみたいと思うので、今は触れない。